

## 合併の経緯 — 大場村 —

## ◇明治の合併前後の大場村

本市の南部、那珂川に面した小場、小野、三美地区は、江戸時代には小場村、福山村、向山村、小野村、三美村の5ヶ村に分かれていました。三美村ははじめ「さびむら」という呼び名でしたが、衰退や荒廃を意味する「寂びれる」という言葉に通じるとい理由で明和元年（1764）に「福島村」に改められ、天保13年（1842）再び三美村（みよしむら）に復したといわれています（『新編常陸国誌』）。また、福山村と向山村は天保13年（1842）に小場村に合併しました。

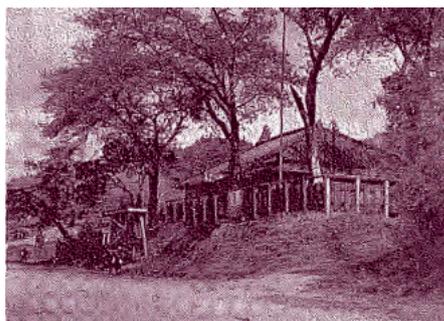
これらの村々は明治5年（1872）に始まる大区小区制では、3か村ともに第10大区1小区になり、同8年の改正で範囲が拡大されると第4大区8小区に組み入れられました。続く連合町村制のもとでは、小野・小場・下江戸（那珂市）の3か村連合と三美村・野口村の2か村連合に分かれ、更に明治17年の改正では、小野村が東野村ほか5か村連合に、小場村は下江戸村と、三美村は野口村との連合村となり、分散することになりました。

その後、明治22年（1889）に施行された町村制により、小規模の町村を合併して適正規模の基礎自治体を作ることが進められました。これにより小場村、小野村、三美村が合併して大場村が発足しました。

大場村の役場は、小場の中心部から北西に少し離れた小場1190番地に置かれました。以後、昭和30年



▲大場村役場跡の現況



▲大場村役場（『大宮町史』昭和33年より）

の大宮町との合併まで同地に所在し、大宮町発足後は大場支所となりました。

## ◇大場村発達史

大場村には、昭和13年に作られた『大場村発達史』という村の概要を記した冊子があります（小場小学校旧蔵、文書館で複製公開）。手書きで作成されたこの冊子は残念ながらこの1年分しか残されていませんが、内容は、村の沿革、教育、産業、交通、河川、池沼、水利、耕地、風俗、災害、面積、戸口、財政など広範囲に及びます。これによれば、昭和13年の大場村の現住人口は2812人、現住戸数は570戸で、主産業は煙草や養蚕を中心とし、薪炭・材木等に頼っていたことがわかります。那珂川沿岸には舟運を担う河岸が建ち並び、三美村の不動河岸（関家）、小野村の上河岸（宇留野家）や下河岸（四倉家）、小場村の安藤河岸をはじめとして複数の河岸が営業していました。久慈川を使って奥州方面から上ってきた年貢米や茶、木材などが山方河岸や高和田河岸で陸揚げされ、三美・小野地域の那珂川の河岸に陸送され、再び江戸方面へ運ばれました。

## ◇大宮町への合併

昭和28年9月に町村合併促進法が施行され、大場村では昭和29年4月初旬に第一回町村合併促進委員会が開催されました。委員会では、分村合併を避けること、対等合併とすることを前提として検討され、大勢としては大宮町への合併を志向するものでしたが、三美地区の一部では野口への合併を志向する動きもあり、最終的には12月30日の議会で可決され大宮町との合併が決定しました。この後、旧町村の代表者により昭和32年から新町の建設計画協議が重ねられ、昭和37年に新町の建設計画の要綱がまとめられました。

この間の史料については、旧大場村の公文書はわずかしかなかった残されていませんが、当時大宮町の助役を務めた小野の宇留野家の文書（当館蔵）から一部を垣間見ることができます。

## 【参考文献】

「大場村発達史」（大場村文書1）、塙泉嶺『那珂郡郷土史』宗教新聞社 大正12年、茨城県総務部地方課編『茨城県市町村合併史』昭和33年、『大宮町史』昭和33年、『大宮町史』昭和52年、宮崎報恩会編『新編常陸国誌』昭和56年

■問い合わせ■ 文書館 ☎52 - 0571 月曜休館